

毎日新聞社

定本
高濱虛子全集

第二卷

俳句集一

〈編集委員〉

高濱 年尾

福田 清人

深川 正一郎

松井 利彦

山本 健吉

定本 高濱虛子全集

第一卷 俳句集(一)

印刷 昭和四十九年十一月二十日
発行 昭和四十九年十二月五日

著者 高濱 虚子

編集人 浜田 疏司

発行人 朝居 正彦

装幀 熊谷 博人

題字 矢萩 春恵

発行所 毎日新聞社

東京都千代田区一ツ橋
100 大坂市北区堂島上

530 北九州市小倉北区紺屋町
502 名古屋市中村区堀内町
450

印刷所 図書印刷

製本所 大口製本

第一卷 俳句集
(一)
目次

五百句……………七

五百句時代……………一〇

解題		丹羽康碩		四八五
----	-------	------	-------	-----

解說		高濱年尾		四九五
----	-------	------	-------	-----

第一卷
俳句集
(一)

凡例

一、句集『五百句』、岩波文庫本『虛子句集』所収の「五百句時代」を底本とし一巻とした。これらの句集が虚子自選であることによる。

一、句形の異同は、初出雑誌、新聞、『新俳句』、『春夏秋冬』、『稿本虚子句集』、『新春夏秋冬』、『自選類題虚子句集』、植竹書院版『虚子句集』、春秋社版『虚子句集』、改造社版『現代日本文學全集』三十八篇、改造文庫『句集虚子』、『現代日本文學全集』四十篇、『明治大正文學全集』二十六卷、『高濱虚子全集』、単行本『句日記』、『俳句文學全集』高濱虚子篇、『年代順虚子俳句全集』、『贈答句集』、『五百句』再版本、『虚子京遊句録』、『定本虚子全集』、『虚子秀句』、角川文庫本『五百句・五百五十句・六百句』、『現代俳句文學全集』高濱虚子集』によって校合し、小字を以て傍に記した。定稿(大字)の誤りは註で正誤を示し、異形句(小字)の誤りは解題で正誤を示した。

一、『贈答句集』(本全集第三卷所収)と重複するものは*印によって示した。

一、各句には初出である雑誌名、新聞名、単行本名を記し、刊行年月を算用数字で示した。

一、詞書については『五百句』はそのままを収録し、『五百句時代』については、『五百句』の体裁に倣って、『年代順虚子俳句全集』の記事を活かし、また「ホトトギス」掲載の「句日記」の詞書を付記することによって体裁の統一をはかった。

なお、「ホトトギス」掲載の「句日記」については、単行本『句日記』との校合をし、異同のある場合は註記した。

一、前書については、『五百句』、『五百句時代』ともそのまま収録し、語句の異同は句形の異同の場合と同様に校合し、各句の後に註記した。

一、『五百句時代』の句で、『五百句』と重複するものは省略した。また、『五百句時代』が季題別であったのを、『年代順虚子俳句全集』の配列によって略制作年代順とし、「ホトトギス」掲載「句日記」により制作年代順に改めた。

五
百
句

自明治二十七年
至昭和十年十二月

序

ホトトギス五百號の記念に出版するのであつて、従つて五百句に限つた。

此頃の自分の好みから言へば、勢ひ近頃の句が多くならねばならぬのであるが、然し古い時代の句にもそれ／＼其時代に應じて捨て難く思ふものもあるので、先づ明治・大正・昭和三時代の句を略等分に採つたことになつた。

範圍は俳句を作り始めた明治二十四五年頃から昭和十年迄、即昭和十一年十一月二十日に出版した「句日記」の句までとしたので、其後の句は此集には洩れてゐる。

昭和十二年五月二十七日

ホトトギス發行所

高 濱 虚 子

春雨の衣桁に重し戀衣

春雨の衣桁に重し戀ごろも

明治二十七年。

夕立やぬれて戻りて欄に倚る

明治二十八年。子規を神戸病院より、須磨保養院に送りて數日滞在。

風が吹く佛來給ふけはひあり

風か吹く佛來玉ふけはひあり

明治二十八年八月。下戸塚、古白舊廬に移る。一日、鳴雪、五城、碧梧桐、森々招集、運座を開く。

しぐれつつ留守守る神の銀杏かな

しぐれつつ留守もる神の銀杏かな
しぐれつつ留守もる神の銀杏かな
しぐれつつ留守守る神の銀杏かな

明治二十八年。

「めざまし草」明29・2
『新俳句』明31・3民友社

「自選類題虛子句集」大3・1「ホトトギス」

「ホトトギス」明37・2
新聞「日本」明28・8・26

『五百句』昭12・6改造社
新聞「日本」明28・11・11
『新俳句』
「自選類題虛子句集」

もとよりも戀は曲者の懸想文

明治二十九年。

「自選類題虛子句集」
『定本虛子全集』四卷
昭25・4 創元社

怒濤岩を噛む我を神かと朧の夜

明治二十九年。

「めさまし草」明29・3

海に入りて生れかはらう朧月

海に入りて生れ更らう朧月
海に入りて生れ更らう朧月

明治二十九年。

「自選類題虛子句集」
「めさまし草」明29・4
「五百句時代」

大根の花 紫野大徳寺

明治二十九年。

「自選類題虛子句集」

山門も伽藍も花の雲の上

明治二十九年。

「日本人」明29・5・5

繩朽ちて水鶏叩けばあく戸なり

繩朽ちて水鶏叩けば明く戸なり
繩朽ちて水鶏叩けば明く戸なり
繩朽ちて水鶏叩けば開く戸なり

「自選類題虛子句集」

新聞「日本」明29・6・4
「新俳句」
『年代順虛子俳句全集』
一卷 昭15・2 新潮社

明治二十九年。

愚庵十二勝の内、清風關

叩 け ども く

水鶏 許されず
敲けども く 水鶏許されず

明治二十九年。

〔註〕前書は「自選類題虛子句集」では「愚庵十二勝の内
清風關」、「定本虛子全集」二卷には「愚庵十二勝のうち清
風關」、「贈答句集」には「明治二十九年・愚庵十二勝のうち、
清風關」とある。

先生が瓜盗人でおはせしか

先生が瓜盗人か瓜畑
先生が瓜盗人で坐せしか

明治二十九年。

病む人の蚊遣見てゐる蚊帳の中

明治二十九年。

蚊帳越しに藥煮る母をかなしみつ

蚊帳越しに藥煮る母をかなしみつ
蚊遣ごしに藥煮る母を悲しみつ
蚊帳ごしに藥煮る母を悲しみつ

明治二十九年。

「自選類題虛子句集」
新聞「日本」明治29・12・24

「自選類題虛子句集」
「ホトトギス」明治30・5
「年代順虛子俳句全集」
一卷

「自選類題虛子句集」

「自選類題虛子句集」
「ホトトギス」明治30・6
「年代順虛子俳句全集」
一卷
「五百句時代」

人病むやひたと來て鳴く壁の蟬

人病むやひたと來て啼く壁の蟬
人病むやひたと來て啼く壁の蟬
人病むやひたと來てなく壁の蟬

明治二十九年。

鶏の空時つくる野分かな

雞の空時つくる野分かな
鶏の空時つくる野分かな

明治二十九年。

弟子僧にならせ給ひつ月の秋

弟子僧にならせ玉ひつ月の秋

明治二十九年。

松蟲に戀しき人の書齋かな

松虫にこひしき人の書齋かな

明治二十九年。

盗んだる案山子の笠に雨急なり

明治二十九年。

元朝の水すてたり手水鉢

元朝の水捨てたり手水鉢

『日本人』明29・8・5

『自選類題虛子句集』

『虛子句集』（植竹書院）

大4・10

『年代順虛子俳句全集』

一卷

『五百句』

新聞『日本』明30・9・4

『春夏秋冬』秋 明35・

9俳書堂

『自選類題虛子句集』

『年代順虛子俳句全集』

一卷

『自選類題虛子句集』

『春夏秋冬』秋

新聞『日本』明30・1・23

『自選類題虛子句集』
新聞『日本』明32・1・1

明治三十一年。

石をきつて火食を知りぬ蛇穴を出る

『自選類題虛子句集』

蛇穴を出て見れば周の天下なり

『春夏秋冬』春 明34・5
ほととぎす發行所

穴を出る蛇を見て居る鴉かな

穴を出る蛇を見てゐる鴉かな

『自選類題虛子句集』
『春夏秋冬』春

間道の藤多き邊へ出たりし

明治三十一年。

間道の藤多き邊に出でにけり
間道の藤多き邊に出でたりし

明治三十一年。

逡巡として繭ごもらざる蠶かな

逡巡として眉ごもらざる蠶かな

明治三十一年。

『春夏秋冬』春

新聞「日本」明32・3・11

新聞「日本」明32・4・24

『春夏秋冬』春

『稿本虛子句集』明41・2
俳書堂

橋 涼 み 笛 ふ く 人 を と り ま き ぬ

橋涼み笛ふく人をとるまきぬ
橋涼み笛吹く人をとるまきぬ

明治三十一年七月二十二日。五月以來母病氣のため松山にあり。
八月に至る。

星 落 つ る 籬 の 中 や 砧 う つ

星落つる籬の中や砧うつ
星落つる籬の中や砧うつ
星墮つる籬の中や砧うつ

明治三十一年。

蒲 團 か た ぐ 人 も 乗 せ た り 渡 舟

蒲團かたぐ人も乗せたり渡舟
布團かたぐ人も乗せたり渡し舟
蒲團かたぐ人も乗せたり渡し舟
蒲團かたぐ人も乗せたり渡船

明治三十一年。

柴 漬 に 見 る も か な し き 小 魚 か な

柴漬にみるもかなしき小魚かな
柴漬にみるもかなしき小魚かな
柴漬に見るも悲しき小魚かな

明治三十一年。

耳 と ほ き 浮 世 の 事 や 冬 籠

耳遠きうき世の事や冬籠
耳遠きうき世の事や冬籠

『高濱虚子全集』十二卷
昭10・2改造社

『自選類題虚子句集』
『年代順虚子俳句全集』
一卷

『自選類題虚子句集』

『日本人』明31・10・20

『虚子句集』（植竹書院）
『虚子句集』（春秋社）昭
3・6

『高濱虚子全集』十二卷

『自選類題虚子句集』

『現代日本文學全集』
（改造社）四十篇 昭
5・5

『年代順虚子俳句全集』
一卷

『自選類題虚子句集』

『現代日本文學全集』
（改造社）四十篇

『年代順虚子俳句全集』
一卷

『自選類題虚子句集』

『高濱虚子全集』十二卷